

海
獸
日
和

長
谷
川
彩

戸
田

岸
本

登
場
人
物

ホイッスルの音。

同時にあがる水しぶきと歓声。

晩夏。晴天。

中学校のプールサイド、ひさしの影のベンチ。

制服姿の生徒が二人座っている。

プールを見つめる女子生徒（岸本）。

プールに背を向けて出席簿を眺める男子生徒（戸田）。

岸本、ふと戸田を見る。

戸田 何か。

岸本 いいえ。

間。

岸本 いい天気ですね。

戸田、聞こえていない様子。

間。

戸田、顔を上げ、岸本を見る。

戸田 今、何か。

岸本 ええ。

戸田 すみません、聞こえなかった。

岸本 いいえ。

戸田 何でした？

岸本 いい天気ですねと。

戸田 ああ。

岸本 ええ。

戸田、名簿を眺める。

間。

岸本 おもしろいですか？

戸田、聞こえていない様子。

間。

戸田、顔を上げ、岸本を見る。

戸田 今、何か。

岸本 ええ。

戸田 すみません、何ですか？

岸本 出席簿。

戸田 は？

岸本 おもしろいですか？

戸田 おもしろいと思います？

岸本 いいえ。

戸田 でしょうね。

岸本 私の声が届かないほど見入っているものですから。

戸田 まだ全員の顔と名前を覚えていないのですから。

岸本 ああ。

戸田 ええ。

短い間。

岸本 本当に？

戸田 まさか。

岸本 でしょうね。

戸田 越してきてもう半年ですから。

岸本 では、もちろん私の名前も。

戸田 もちろんです、佐藤さん。

短い間。

戸田 冗談です、岸本さん。

岸本 佐藤でも構いませんが。

戸田 そういうわけにもいかないでしょう。

岸本 佐藤だろうが岸本だろうが、戸田君のお好きなように。

戸田 では、ぜひ岸本さんで。

岸本 よろこんで。

間。

岸本 いい天気ですね。

戸田、聞こえていない様子。

岸本 (大きめの声で) いい天気ですね。

戸田、聞こえたが無視している様子。

岸本、体半分ほど戸田に近づく。

戸田、体半分ほど岸本から逃げる。

岸本、戸田を見る。

間。

戸田 ……(仕方なく) いい天気ですね。

岸本 そうですね。

戸田 絶好の見学日和だ。

岸本 ええ。

戸田 義務教育最後のプールの授業が見学だなんて、岸本さんはよっぽど日頃の行
いがいいんでしょうね。

岸本 どうもありがとうございます。その言葉をぜひ戸田君にも。

戸田 どうもありがとうございます。

間。

岸本 戸田君は、どうして見学なんですか？

戸田 答えなきゃいけませんか？

岸本 聞いてはいけないことなら撤回します。

戸田 (わざとらしく咳き込む)

岸本 お大事に。

戸田 どうもありがとうございます。ちなみに岸本さんは？

岸本 答えなきゃいけませんか？

戸田 撤回しましょう。

岸本 どうもありがとうございます。

戸田 ただし、想像はします。

岸本 どうぞご自由に。

戸田 ありがとうございます、楽しませてもらいます。

岸本 戸田君は、そういう話題に興味がおありで。

戸田 岸本さんはご存知ないかもしれませんが、僕、今思春期なんです。
岸本 よく覚えておきます。
戸田 そうしてください。

生徒達の声と水しぶきの音。

岸本 戸田君もこちらを向いてはいかがでしょうか。

戸田 どうして？

岸本 そちらはおもしろくないでしょう。

戸田 そちらはおもしろいとも？

岸本 そちらよりかは幾分か。

戸田 いやいや。

岸本 またまた。

戸田 コンクリートと有刺鉄線も、これでいてなかなか。

岸本 またまた。

戸田 いやいや。

岸本 どれどれ。

岸本、プールに背を向け、壁側に向かって座り直す。
間。

戸田 僕が悪かったと言えればいいのかな。

岸本 何のことやら。

戸田 岸本さん。

岸本 はい。

戸田 他人と生きていく上で、一番大事なものってなーんだ？

岸本 何でしょう。

戸田 距離感です。

短い間。

岸本、プールの方を向いて座り直す。

戸田 お気遣いどうもありがとう。

岸本 どういたしまして。

間。

騒がしい声が耳に障る。

岸本 楽しそうですね。

戸田 まさか。

岸本 は？

戸田 え？ (勘違いに気づき) あ。

岸本 まさか。

戸田 すみません。

岸本 どういたしまして。

戸田、ばつが悪そうにする。

岸本、素知らぬふり。

短い間。

不意にひとときわ大きな歓声。

岸本 (舌打ち)

短い間。

戸田、こらえきれず吹き出す。

岸本 何か。

戸田 いいえ。

岸本 いけませんか？

戸田 至って健全です。

岸本 どうもありがとうございます。

戸田 うらやましいんですね。

岸本 不意ですが。

戸田 そうですか。

岸本 おかしいですか？

戸田 いいえ。よかった。

岸本 よかった。

戸田、何かに気づいた様子。

岸本 よかったですか。

戸田 ……いいえ。

間。

岸本、再びプールに背を向け、壁側に向かって座り直す。

戸田 岸本さん。

岸本 はい。

戸田 他人と生きていく上で一番大事なものってなーんだ？

岸本 距離感。

戸田 正解。

岸本 どうもありがとう。

戸田 では、正解した岸本さんに一言。

岸本 どうぞ。

戸田 僕とは距離を置いた方がいい。

岸本 どうして？

戸田 わかっているでしょう。

突然、背後から水がかけられ、二人はずぶ濡れになる。

戸田 こうなるからですよ。

生徒達の嘲笑。

タオルが飛んでくる。

二人、タオルで体を拭く。

戸田 すみません。

岸本 わかりませんよ。

戸田 は？

岸本 戸田君か、私か。

戸田 ……。

岸本 わかっているでしょう。

戸田 ……着替えたらどうですか？

岸本 ……。

戸田 透けてますよ。

岸本 ……。

岸本、去る。

戸田、タオルで頭を拭う。

次第に背後の雑音が大きくなる。

戸田、耳に水が入ったのか、頭を傾けて振る。

何度かくり返すが出ないのか、そのうち諦め、もう片方の耳を手でふさぐ。
雑音が低くこもる。

間。

岸本、戻ってくる。

ひさしの外で立ち止まり、戸田の背を見る。

戸田 何か。

岸本 いいえ。

岸本、プールに背を向け、壁側に向かって座る。

戸田 気にしないんですね。

岸本 キヤミソールです。

戸田 ああ、そうですか。

岸本 ええ。

戸田 男にとっては同じようなものですけどね。

岸本 よく覚えておきます。

戸田 そうしてください。

戸田、壁を背にしてプールに向かって座り直す。

岸本 よかったって言いましたね。

戸田 ……。

岸本 さつき私が、みんなをうらやましがったら、戸田君、よかったって言いましたね。

戸田、聞いているのかいないのか、水の入った耳を下にして頭を傾ける。

岸本 覚えてますか。

戸田 覚えてません。

岸本 ……何がよかったですか。

戸田 さあ。

岸本 みんなが泳ぐのを私がうらやましがるのが、どうしてよかったんでしょうか。

戸田 わかりません、覚えてないんで。

戸田、頭を傾けたままじっとしている。

岸本 じゃあ、初めて会った時のことは、覚えてますか？

周囲の音が遠のき始める。

岸本 去年の県大会、会場の医務室で会った時のこと。まだ戸田君が前の学校にいた頃。まだ私が、水泳部だった頃。

雑音が消えていく。

代わりにこぼ、こぼ、と水中で空気のもれる音が聞こえる。

岸本 私が棄権した、決勝の後。

戸田、丸めたタオルを枕にして、ベンチに寝転がる。

岸本、濡れた髪を垂らして、ベンチに座っている。

水中にいるような、鼓膜を圧迫する閉塞感。

そこは医務室である。

戸田 あのね。

岸本、反応しない。

戸田 僕、耳に水が入りやすいんだ。それでよくこうやって休ませてもらうんだけど、でも、僕この感じは嫌いじゃないんだよ。だってほら、耳の奥がボーっとする感じって、水の中にいるみたいだろう。

岸本 ……。

戸田 あの、聞いたことないかな。人間と鯨が元々同じ生き物だったって説があるんだ。海で暮らしてた祖先が、何かの拍子で陸に上がって、そのまま陸に残ったのが人間、もう一度海に戻ったのが鯨だって説。僕は、この説いいと思って、人間にもどこか鯨の部分が残ってると思うんだ。だって僕は、君もそうだろうけど、こんなに泳ぐのが好きなんだから。

岸本 ……。

戸田 それでね、鯨は海で生きるわけだから、水の中で色んなことがあるわけだよ。

ご飯食べたり、仲間と泳いだり、生まれたり、死んだり。その、もちろん、血だ
って出るだろうしね。

岸本 ……。

戸田 あの、僕は男だからよくわからないけど、その、当たり前なんじゃないかな
って思うんだよ、血が出るって。僕は、それは生きてれば当然あることで、大し
たことじゃないんじゃないかと思うんだよ。それは、気にはするけど、するだろ
うけど、もし仮に、僕達が鯨だったら、人間と鯨がわかる時に、僕達が鯨を選
んでたとしたら、そういうのは当たり前のことだったと思うんだよ。僕達は、今
は人間だけど、あの時鯨になることを選んでたら、今日のことは、全然気にしな
くていいと思うんだよ。

岸本 ……。

戸田 だから、もし君が今、泳ぐのをやめようと思ってるとしたら、考え直してほ
しい。

岸本 ……。

戸田 もつたいないと思うんだ。だって、君は泳ぐのが好きはずだから。見れば
わかるよ。だって、その、君は、鯨みたいに泳ぐんだ。あの、速いとか遅いとか、
そういうのじゃないんだ。僕達は人間だから、もうそういうことでしか泳げない
かもしれないけど、でも違うんだ。君を見てたら、水の中にいるのが当たり前の
ことなんだって思える。僕達はやっぱり昔鯨だったって思える。それがいいんだ。
誰もいって言わなくても、僕は好きだ、君の泳ぎが。

岸本 ……。

戸田 あの、つまり、何が言いたいかって言うと。

岸本 うん。

戸田 (返事され少し驚き) ……君は、泳ぐべきだ。

岸本 ……ありがとう、中村君。

戸田、起き上がる。

戸田 覚えてますよ。

岸本 そうですか。

戸田 それが何か。

こぼ、こぼ、と空気のもれる音が休息に遠ざかり、雑音がよみがえる。
騒がしい元のプールサイド。

戸田 岸本さん。

岸本 はい。

戸田 同情してるんですか。

岸本 いいえ。

戸田 じゃあよかった。

岸本 ……。

戸田 距離感、大事にしましょうね。

教師の「あと一分」の声。

生徒達のブーイング。

岸本 同情なんかしてません。

戸田 ……。

岸本 同情なんかしてません。

戸田 まだ何か。

岸本 私は、中村君が泳ぐのをやめたって知って、水泳部をやめました。

戸田 ……。

岸本 中村君が、誰よりも速い中村君が、私を気にかけてくれた。私の泳ぎをいいって言うてくれた。私を励ますための嘘だってわかってたけど、私はそれでもよかった。だからあの日、中村君に大したことじゃないって言われて、あれは本当に大したことじゃないのかもしれないって思いました。大したことじゃない。大したことじゃない。ただ私が、ここから動けないだけで。

戸田 ……。

岸本 だから、きっと大したことじゃないんです。あの日のことも、中村が戸田になつたことも。もし私達が鯨だったら、きっとこんなに苦しんだりしなかった。

戸田 僕達は鯨じゃないですよ。

岸本 今はそうかもしれない。

戸田 人間です。

岸本 でも、鯨だったかもしれない。

戸田 いい加減にしませんか。

岸本 つまり、何が言いたいかって言うのと。

戸田 何ですか。

岸本 君は、泳ぐべきだ。

ホイッスルの音。

歓声がやみ、名残惜しそうに水しぶきがざわめく。

戸田 君もやめたじゃないか。

岸本 ……。

戸田 いくら大したことじゃないって言ったって、君も泳ぐのをやめたじゃないか。

岸本 やめてませんよ。

戸田 ……。

岸本 やめてません。

岸本、立ち上がり、体を伸ばす。

戸田、立ち上がり、岸本の背を見る。

戸田 何する気ですか。

岸本 泳ぐんです。

戸田 やめた方がいい。

岸本 ……。

戸田 君もわかってるはずだ。そんなことして、これからどんな目にあうか。僕はそんな思いをさせるために、あの日、鯨の話をしたわけじゃない。

岸本 ……わかってます。

戸田 わかってないじゃないか。

岸本 ……。

戸田 もうやめてほしいんです。僕はもう戻りたくないんです。どうして泳がなきゃいけないんですか。人間で何が悪いんですか。それほどのことだったんだ、あの日のことも、名字が変わるのも。大したことじゃないって言ったけど、あんなの嘘だ。僕は何もわかってなかった。それほどのことだったんだ。だからもういい。もうこのままでいい。

岸本 こんなに苦しいのにな？

戸田 ……。

岸本 戻りましょう。

戸田 ……僕はいい。

岸本 駄目です。

戸田 僕はこのままでいい。

岸本 嫌です。

戸田 君には関係ない。

岸本 あります。

戸田 ない。

岸本 助けます。

戸田 なんで。

岸本 助けたいんです。

戸田 だからなんで。

岸本 戸田君はご存知ないかもしれませんが。

岸本、ひさしの影から外へ出る。

岸本 私、今思春期なんです。

岸本、プールに向かって走り出す。

戸田、ひさしの影から外へ飛び出す。

同時に水面を激しく叩く音。

生徒達の一瞬の悲鳴。

揺らぐ水面。

静寂。

太陽の光が、戸田の全身を包んでいる。

静かに水をかく音が近づいてくる。

岸本、顔を出す。

その瞬間、戸田が笑い出す。

岸本、プールの縁につかまり、戸田を見上げる。

戸田、岸本に手を差し出す。

戸田 おかえり。

岸本、ほほ笑み、戸田に向かって手を伸ばす。

終わり